

「アンコール朝」とカンボジア史

増山雄三

「アンコールワット」は、カンボジアのユネスコ世界遺産アンコール遺跡の一つで、クメール語では「アンコールは「王都」でワットは「寺院」を意味するが、大伽藍と美しい彫刻を特徴にして、クメール建築の傑作とされ、カンボジア国旗の中央にも、同国の象徴として描かれている。

九世紀に初頭に成立した、クメール王国のアンコール朝は、アンコール周辺に築城していて王都としていたが、十二世紀前半に即位したスーリヤヴァルマン二世は、それまでの都城に代わり、隣接地に新しい王宮を建設して、その南隣に国家繁栄のため、新しいヒンズー教の寺院も建設したが、これが、「アンコールワット」なのである。

これまでアンコール朝の主流だった、ヒン

ズー教のシヴァ派に代わって、スーリアヴァ
ルマン二世が篤く信心していた、ヴィシュヌ
派の寺院として、王の在中に膨大な費用をか
け、三十年の歳月を費やして建設したが、一
部は、未完成のまま残されてしまった。
それで、アンコール朝末期には、大規模寺
院の建築が国力を疲弊させたという通説があ
るが、近年の発掘では、大型の窯跡が見つか
るなど、一面的な見方で捉えられないという
ような、歴史像が浮かびあがっている。
また、カンボジャ史では、アンコール朝前
後の研究も進んでいて、ポストアンコール期
については、日本人町等の調査が行われ、日
本を含む海外との活発な交易で、一定の国力
を蓄えた点も、再評価されている。
更に、カンボジャ考古学では、日本が果た
した役割が大きく、現在ではカンボジャ人の
研究者も含め、国際的かつ学際的な研究で、
新たな論点や見方が活発に示されている。
カンボジャの国旗には、一九五三年にフラ

ンス領インドシナ連邦から独立後、アンコールワットが描かれているが、それは、九世紀以降繁栄した、クメール人国家アンコール朝の、「最高傑作」と名高く、十二世紀末に建設されたこの寺院は、今も国民文化の象徴として、高く位置付けられている。

それで、カンボジャ史の研究は、仏植民地時代の十九世紀末から蓄積があり、内戦後の復興期にあたる九〇年代以降は、日本などの海外隊の調査が活発だったが、近年ではカンボジャ人研究者も活躍して、アンコール朝前後の、新たな見方や論点が提示されている。

それによると、アンコール朝は、インドシナ半島の大部分を版図にした、ジャヤバルマーン七世の治世に、大寺院の建立が相次いで国力が疲弊し、十五世紀には、タイのアユタヤ朝に亡ぼされたと説明されてきた。

それでも、上智大調査団が、今世紀に発掘した二百八十体の仏像が、大乘仏教を信仰した七世のものであると分ったが、二代後の王が

ヒンズー教を信仰したため、廃仏などの大規模な仏教弾圧が行なわれたので、大量の仏像群が、地下に埋められてしまったという。それでも、八世紀以降は、上座部仏教信仰が民衆に浸透して、奈良文化財研究所（奈文研）が調査する、アンコール遺跡内の寺院では、ヒンズー教から仏教寺院に改築された建物で、焼けた骨片に金製品やガラス玉を奉納した、煉瓦の遺構が確認されているのは、当時の宗教活動の実態を示すものと思われる。それについて、早大の田端教授は、「壮大な儀式のため、大規模建築を必要とした、ヒンズー教や大乘仏教から、新たな宗教に変わったことで、大寺院を必要としなくなった。王朝末期に価値観の変化があったのではなからうか」と、その経緯について説明する。

それで、末期の遺跡では、黒褐釉がかった「クメール陶器」を生産した、巨大な窯跡群の発見も注目されるが、田端教授は、寺院がなくなる時期に、大量の焼物を作る必要があ

ったのか分らないというが、この窯跡の調査が、新しい歴史像を描く可能性もある。

それでも、アンコール朝以前では、六世紀以降に栄えた、クメール人国家である、真臘の首都イーシャナプラで発掘されたサンポール・プレイ・クツク遺跡が注目され、インド系とクメール様式の瓦がそれぞれ出土し、インドの影響やアンコールの成立過程を探る点では、極めて重要なものである。

その後、アユタヤ朝の攻撃により、アンコールが放棄され、首都がスレイ・サントー、プノンペン、ロンベーク、ウードンと変わった、十五世紀以降の「ポストアンコール期」の研究が、少しずついま進んでいる。

それは、アンコール朝末期での衰退で、説明される時代だが、日本との交易記録が、江戸時代に交わされた書簡に残されており、また、オランダの艦隊を退けたという、カンボジヤの軍事力を示す記述もあり、その交易の証として、那覇首里城の遺跡から、クメール

陶器が出土している点も見逃せない。

江戸時代初期には、日本人がアンコールワットを、インドの「祇園精舎」だと思いついで、参詣したという記録もあるが、近年、同寺院から発掘された仏像が、ヒンズー教から仏教に信仰が変る、過渡期に迫る資料であるとされ、多様な歴史の謎を解明するための、今後の詳細な分析が待たれている。

ところで、一九七〇年代以降、カンボジアでは、内戦やポル・ポト政権による知識人弾圧で、歴史研究が中断したが、日本はカンボジアの和平以降、アンコール遺跡を中心とし、同国の文化財の調査や修復に対する、主導的な役割を果たしたのである。

そんな事もあって、現在も、アンコール遺跡の保存修復会議では、フランスとともに、共同議長国を務め、上智大が手掛けてきたアンコールワット西参道の修復も行っているが、さらに、日本国政府による、「アンコール遺跡救済チーム」による、バイヨン寺院の

修復などについては、それによる、カンボジヤ人研究者の育成の面でも評価を得ている。先の田端教授は、「カンボジヤ人の研究者と、外国人の研究者との間で行われる共同と協業は、それ以降には、カンボジヤ考古学における、スタンダードとなりつつある」といって、それについての手応えを話す。一方で、日本人町の調査をてがけている、奈文研の佐藤主任研究員は、「アンコール朝の、『黄金時代』を研究したい人は沢山いるので、ポストアンコール朝の関心はそれほど高くないのだ」ともいつている。とはいえ、こうした地元での無関心というのは、知らず知らずのうちに、遺跡が破壊されてしまうという懸念もあるので、先の田端教授は、「アンコール朝の壮麗な寺院だけでなく、窯跡などの目立たない遺跡の重要性なども、詳しく理解して貰う事が必要なのだろう」と、今後の施策に期待している。

令和四年六月